

## 診療所の日常紹介

### スタッフパワーの源 いっぽのサラメシ

1991年当院開設時より続く職員食堂。小笠原医師が「スタッフ皆で家族のように温かい食事をしよう」と始めました。現在の調理担当は6代目染川さん。訪問から帰って漂う香りと温かいごはんにはパワーをもらえています。



スタッフの  
「美味しい！」が  
励みになっています

調理担当 染川



豆乳担々麺

やったー！  
これ大好き!!



ひなまつり

今日の  
メニューなに〜？  
(ワクワク)



パステードメッセージ



グリーンカレー

なんで、  
こんなにカラッと  
揚げられるの!!



ミックスフライ



お赤飯

もう、  
店出しだよ

## スタッフ紹介



看護師 長沢 仁子

### 仕事で大切にしている事

「寄り添える看護がやりたい」といっぽにやってきて、今年21年を迎えます。外来では、笑顔で傍らに。どんな些細なことでも相談できるよう、安心して任せられると想っていただけるよう心がけています。訪問では、耳を傾け手を差し伸べ隣にいることしかできませんが、自分ができる事をこれからも続けていきたいと思っています。

### わたしの元気の源

自信喪失している時は、笑顔や言葉で元気チャージです。美味しいものを食べお酒を飲み、大切な子供たちに会えるのは更に元気アップです。今年はライブが当選できると最高かも…



Cheers !

## 医療法人一歩会

## 緩和ケア診療所・いっぽ

2025年  
10号



～在宅医療を始めて5年が経ちました～

様々な選択に悩む患者さん、症状と折り合いをつけながら暮らしている患者さん、たくさんの方とお話してきて感じるがあります。それは、変化に対して気持ちは揺れ動くということ。そして、その揺れがきちんと整わない中でも、安らぎを見出しながら過ごされているということです。

数か月前までお元気でギターを弾いていらしたAさん。多くを語らない方でしたが、楽器の話になると表情が明るくなるのが印象的でした。

何回目かの訪問の際、Aさんのお部屋には2本のエレキギターが飾られていました。「寝たままだと弾けないね」とおっしゃりながら、以前のようにギターを弾くことはできなくなったものの、思い出のギターを眺めながら、そこにはやさしい時間が流れていました。

そのとき、Aさんが「先生のサクスをぜひ聴きたい」と言ってくださいました。訪問診療では予期せぬことが起こります。そんな時のために、訪問バッグは予備品でバンバンに詰め、車にも種々の品を忍ばせています。この日は、そんな偶然に備えてサクスを車に忍ばせておいたことが功を奏しました。

密かに練習していたビートルズの「ヘイ・ジュード」を演奏すると、ビートルズファンのAさんは拍手をして喜んでくださいました。「もう一曲お願いします」とおっしゃり、ベッドの脇に置いてあったビートルズのギター楽譜を息子さんに取ってもらい、アンコールをお願いされました。開いて見せてくださったのは「イエスタデイ」。Aさんは少し口ずさみながら、しみじみするように演奏を聴いてくださっていました。楽譜を一生懸命にめくる姿、音楽を聴きながら穏やかな表情を浮かべるその姿に、温かい気持ちがかみ上げました。

その後の訪問では体調の相談が多く、演奏会はその日1回限りとなりましたが、あの日の出来事は、今でも温もりのある残像のように心地良く心に残っています。

症状や生きづらさを抱えながらも、望みや喜びを繋ぎながら過ごされている姿は、とても素敵だと感じています。それは、私には到底真似できないことのようにも思えます。

日々、患者さんとご家族の過ごし方や言葉から、たくさんの活力をいただいています。これからも、多くの方が心地良い時間を紡ぎながら過ごしていけるように、寄り添い、伴走していきたいと思います。

緩和ケア診療所・いっぽ 医師 塚越規子





# 希望をカタチにする！あきらめない！

いっぽでは、一人ひとりの暮らしに寄り添いながら患者さんとご家族の「やりたい」という願いを実現するためにスタッフみんなで知恵をしぼっています。  
例えば、手が動かしにくい方のためにオリジナルな自助具を作ったり、痛みがないように着られるように衣服を工夫したり…。  
また、自宅でのコンサートや旅行を叶えるサポートなど、色々な取り組みをしています。今回はそんな温かい在宅ケアの様子をご紹介します。

## ズボンをはきたい

Bさん 60代 女性 骨肉腫

病状が進行し寝たきりとなったBさん。

腰の瘻孔から浸出液や排膿があり毎日訪問し処置が必要でした。液漏れによる衣服汚染の心配と、衣服の重なる場所が痛みのある腰部に集中するために「ズボンを履かない」「シャツは背中側を半分まくる」というスタイルで過ごすようになりました。

アンティークレースや花柄のお洋服が大好きでおしゃれなAさん。布団を外すとオムツ姿なのは恥ずかしいけれど、仕方がない…と洋服を通常通りに着る事は諦めていました。

そこでスタッフがアイデアを出して、『上着の不要な部分は切って裾の始末をすればいいのではないかな。ズボンは大腿部まで着ることができるのだから、おしりの部分をカットして上側が腰下まで下があれば履いているのと同じように着用できるのではないかな』と提案。

### 💡 ご本人のお洋服をリフォーム



赤線をカット！  
折り目は肌の刺激を避けて外側に。伸びる糸でロックミシンをかけて端の始末。



リフォームしたシャツを着たAさん

「わあ～背中が楽～」

リフォームしたズボンを履いたAさん

「私…ずぼん 履けているのよね！」

涙をうかべて笑っているお顔を拝見し、ご家族も私たちも笑顔になりました。

## 診察を超えて音楽で心をいやす

症状を抱えながらも楽しみや喜びの時間を過ごしたい。

医師という立場を超えて何ができるかを考えた結果、楽器の演奏につながりました。

訪問診療先でサクスを奏でる時、患者さんの穏やかな表情に胸が温まります。



施設のクリスマスコンサートでは、スタッフと共に演奏しみんなで楽しい時間を共有しました。診察だけでなく心の安らぎを届けることも大切なケアの一つだと感じています。

## みんなで温泉に行きたい

Cさん 70代 女性 肺癌

終活と身辺整理を行い、お料理レシピやご家族の想いをノートに綴られているしっかり者のCさん。

みんなの思い出に最後の旅行をしたいと県内の温泉を予約されていた。

ところが、呼吸の苦しさが増してしまい外来にすることが難しくなり訪問診療に切り替えるほどの状態になりました。

「みんなの迷惑になるから…」と「これくらいなら温泉に行けるかしら…」と、悩む姿がありました。ご家族も旅行を実行したいけれど、不安もありました。

頓服薬での症状コントロールをきめ細やかに、酸素ポンプの手配、宿泊施設への



在宅酸素器の設置を行いました。  
「無事に温泉に行って来られました」と報告してくださるCさんとご家族は本当に嬉しそうでした。  
愛情あふれるご家族と、感謝するCさんと、気遣いのある温かさに包まれたひとときでした。

## いつものTシャツが着たい

Dさん 40代 女性 乳癌

退院後の悩みは、右腕の強い浮腫で思うように動かせない右腕。

夏は猛暑で「自分のTシャツを着たい！」けれど、腕の挙上ができずかぶりの服は着ることが難しい状態でした。前空きのボタンシャツは若者向けではなく、デザインが苦手なもののばかり…。そこで『きつさのある袖を広げて、前は切ればいいのでは』と提案。

リフォームしたシャツを着たDさん。

「うわあ～嬉しいー！ー！」と笑顔。娘さんも笑顔。その後は2枚用意したTシャツを交互に着ていただきました。そして、エンゼルケア時にも「ママが喜んで着ていたから」と最後の装いにも選んでいただきました。

Tシャツ前をカット！そでのすそを広げて当て布をプラス。

別布で前立てをつけて、スナップボタンテープを縫いつけました。

### 💡 ご本人のTシャツをリフォーム

